

<緊急企画>

研究者が出演するテレビ番組のあり方

テレビ・ラジオに多数出演された城生佰太郎先生。私も幾度となく現場に立ち会ったことがあるが、2012年のNHK『クローズアップ現代』については、筑波大学への移動中に車内で意識を失ってしまったため現場に立ちあえなかった。私事だがそれ以降約1か月間の記憶がなく、3か月にわたる入院を強いられたため、放送がどのようなものかを把握できなかった。退院後かなりたってから放送を確認したが、構成もコメンテーターもひどいものであった。昨今のテレビ番組に対して出演した研究者からクレームが入るケースが増えつつあるのが理解できた。今から思えば、私が倒れたのは悪い予感の予兆だったのかもしれない。

閑話休題。昨今の学術成果を利用した番組では、誠意あるスタッフもいる一方で、傲慢あるいは無知・無理解によって、ただのとんでも番組しか作れないのがある。そういった背景をふまえ、城生先生ご自身の古希記念論集の場を借りて、先生からNHKあてに送られた抗議文を公開することが、これからの研究者に益するところがあると判断した。城生先生に許可をいただいたうえで、本ページ下段より原文をそのまま公開している。今後、各種メディアから出演依頼が来た時には、一応の覚悟をもって出演される方がよいということに気づいていただければ幸甚である。なお、プロデューサー、ディレクターの実名については、私の判断で氏名を伏せている。

(企画・構成：福盛貴弘)

「NHK クローズアップ現代に対する抗議」

城生佰太郎

2012.01.30.に、NHK クローズアップ現代担当ディレクター△△ △△氏の来訪を受け、急遽制作した資料。番組の構成は、

- 1.目的：由紀さおりのブレイクした理由を探る
- 2.方法：(1)アメリカに行って、4人の人にインタビューする
(2)3人の学者による検証を行う。分野は、音楽学、音声心理学、音声学。
- 3.結果に基づく討論：スタジオで、司会者とアメリカ人アーサー・ビナードによる対談。

なお、この放送は視聴率 15.3%を記録した(ビデオ・リサーチ調べ)。

世界を魅了する日本の歌謡曲 ～由紀さおり ヒットの秘密～ 視聴率 15.3%

私は、次ページ以下に添付した抗議文をNHKに叩きつけ、以降の番組出演を拒否した。

21日放送のクロ現制作に関与した人間の一人として、強く抗議します。

結論を先に述べれば、今回の制作態度は、真摯な思いで学問をやっている人間を愚弄するものであり、あのような傍若無人な制作態度を看過することは、我が国を代表する公共電波発信元であるNHKの将来にとって、そして国際的なレベルでみた映像文化一般にとっても、決して褒められた態度ではないことを訴え、学者の立場から断乎抗議します。

1. 番組の流れ

1.1. 目的：由紀さおりのブレイクした理由を探る

1.2. 方法：(1)アメリカに行き、4人の人にインタビューする

(2)3人の学者による検証を行う。分野は、音楽学、音声心理学、音声学。

1.3. 結果に基づく結論：スタジオで司会者とアメリカ人アーサー・ビナードによる対談。

2. 問題点

2.1. 総論

あらかじめ、ベン・Eキング、トーマス・ローダーデール、それにニューヨーク在住の一般市民1名（ウラジミール・ゲオルギエフ）らによって指摘されている「心に自然や海が浮かぶ」「夏のそよ風のような美しさ」「浮世絵のようなただよう感覚」といった情緒的な文言を、スタジオにおいてアーサー・ビナードがダメ押しする。

上に述べた本線の流れに対して、木に竹を継いだように、ほんの申し訳程度に学者を適切にちりばめて、一般の視聴者に番組の権威と正当性を押し付ける。この部分が、最大の問題点である。

2.2. 各論(1)制作に際しての根本的姿勢

芸術論を展開するのか、それともある現象に対して科学的な検証をするのか、プロデューサーのこの点に関する根本的姿勢がぐらついており、結果としてこの作品を失敗に導いている。つまり、上の2.1.で述べたように「はじめから結論ありき」の、トップダウンによる演繹的方法で番組作りをしており、現象と真摯な態度で対峙するという姿勢が見られない。

せっかく識者の考えを取材しているのだから、そこから上がってきた事象をうまく吸い上げつつ番組の結論を導くという、ボトムアップによる帰納的方法論の欠如がこの番組を散漫なものとしてしまった最大の敗因である。

2.3. 各論(2)目立ったエラーについて

気づいた範囲で、エラーについて報告しておきます。

(a)音楽学の先生が、Puffのなかから次の部分を抜き出して「日本語では同じフレーズに盛り込める単語数が少なくなる」と述べているが、たしかに訳詩の場合には一般論として日本語の「拍(またはモーラ)」という単位と印欧語に見られる子音優位の音節構造とのギャップか

ら、そう言えなくもない。しかし、このことを「同じ意味を表すのに日本語では多くの語数を要する」と単純に誤解されると困る。その証拠に、そのような逆の例が、本番組のあとの方で示された具体例に出ている(図1)。この点は、ひとこと番組内で断るべきであったと思う。



図1 英語より日本語の方が単語数の多い例

図1から明らかなように、このケースでは英語が3単語であるのに対し、日本語は7単語ということになり、倍以上の単語数を要する。ちなみに、語数をカウントする際には辞書に見出し語として掲載されているものを一応の目安とするのがよい。そうすると、日本語の例は「わたし」「は」「あなた」「を」「あいし」「て」「います」となって7語である。ついでに指摘しておく、日本語のローマ字表記が間違っている。「watasiha」ではなく、「watashiwa」である！

これでお分かりいただけたと思うが、音楽学の先生が Puff の中で分節していた日本語も、言語学的レベルから正しく切れば、「みどり」「の」「うろこ」「ならし」「て」「泣い」「た」となるので英語が11単語であるのに対し、7単語も入っている勘定になり、それほどの大差にはならない(図2a,b)。



図2a 英語 11 単語



図2b 日本語 7 単語

日本語は、「みどり」「の」、「ならし」「て」、「泣い」「た」と切るのが正しい。

(b) 音声記号の誤り

電話取材による安易な方法を取ったため、十分なコミュニケーションがとれなかった。
音声心理学者の出演場面で用いられたフリップの音声記号は、正しくは

[aïlʌvju:] または [aïləvju:]

となる。この表記で、[i] は「音節副音」といって、母音ではない。だから、全体で母音の数は3個と言えるのであって、フリップのように表記してしまうと4個と言わなければならない。

(c) フォルマンントの扱い

城生 侑太郎出演場面で、大幅にカットしてしまったために、「声のよさ」「厚み」「透明感」「豊かさ」などを示唆する声道の共鳴パラメータを表しているフォルマンント（周波数成分集合）の扱いが粗雑で、あれでは半分しか説明できていない。△△さんには何度も口頭で注意したように、本数だけではなく出現する位置や強さ（グラフ上では黄色く光っている部分）にも注目し、これらを擦り合わせなければならない。ちなみに、私は警視庁公安からの委嘱で脅迫電話の声の鑑定をして NHK のニュースに出演したこともあり、個人の特定に関する専門的知見もあわせ持っている。

(d) アーサー・ビナードの発言

「大学の先生が出てきて、フォルマンントの本数がどうだとか、音声心理学がこうだとかと言うけど」という文言は、われわれ学者を愚弄するものであり、謝罪と訂正をお願いしたい。

以上。

2012年2月23日

